



2015年(平成27年)

9月号(No. 844)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

御嶽山大噴火を振り返る……	1
登山・学術分野の進捗報告と、	
山麓の水河調査行へのお誘い……	4
「山の日に向けて」山を考える④ …	6
「山の日」メモ 各地で祝日制定	
記念の催し……	7
第35回日本登山医学会開催報告される…	8
外国人登山者の受け入れ態勢	
登山計画書の英文化について …	9
日本三百名山登頂シリーズ②報告 …	10
日本山岳会 第32回全国支部懇談会 …	11
活動報告……	11
集会委員会	
支部だより……	13
東九州支部/越後支部/東京多摩支部	
日本三百名山登頂シリーズ⑥…	14
新入会員……	16
図書紹介……	17
図書受入報告……	17
会務報告……	18
ルーム日誌……	18
会員異動……	19
INFORMATION ……	19
編集後記……	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木……10～20時
水・金……13～20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10～18時

御嶽山大噴火を振り返る

1年前の9月27日、霊峰御嶽山が突然大噴火した。秋晴れの土曜日のお昼時、紅葉を愛でる登山者でにぎわっていた山頂は、まさに青天の霹靂のごとく、修羅場と化した。その現場から九死に一生を得て脱出された、一登山者の生々しいレポートをお届けする。

津野祐次

2014年、御嶽山の森林限界付近は、紅葉が見事であった。9月26日までは、中央アルプス北部の山々や千畳敷周辺を取材、稜線上から西に御嶽山を見ていたので、紅葉の最盛期と確認していた。

入山に先立って気象庁のHPを検索、火山性地震が約1週間前から続いていたが、噴火警戒レベルは1だった。噴火が近いかもしれないが、明日入山するしかないとした。紅葉期間は極端に短く、1日も無駄にできない。現地で入山

禁止を知ったのでは、貴重な1日が無駄になる。登山に伴う情報を入手することは不可欠だった。

9月27日は、いつものように単独で御嶽山へと向かった。未明に開田高原の地蔵峠に着き、御嶽山を眺めた。広い山頂部は雲に覆われていたが、王滝頂上付近のみ雲がなく、異様に光っていた。しかし、稜線上は晴れていると確信できた。微弱な地震が続いていることを考慮し、王滝コースは断念、黒沢口を選んだ。



九合目のすぐ上、飛び出た稜線上。噴火の6分前

御嶽ロープウェイを利用し、黒沢コースを経て8合目の女人堂まで登った。

下界から上昇した暖かな空気が雲へと変化し、山頂部は見えなかった。急いで登れば雲を追い抜き、紅葉と青空に輝く御嶽が見えるだ

ろうと先を急いだ。8合目半「明治不動」に着くと前方が晴れ出し、視界いっぱいには紅葉の山肌と稜線部が見えた。「こんなことつてあるのかな?」と、目を疑った。噴火の前兆に伴って地熱が上がり、下界からの暖かな空気が一瞬に飽和されて晴れたとは予測できなかった。「近年の異常気象のせいでは、このような幸運があるのだ」と理解して先へ進んだ。これが第一の反省点であった。事実、このとき気温が高くなり、着ていた長袖シャツとダウンベストを脱ぎ、ザックの中へ収納している。

9合目へと急な登りにかかる辺りで、地下水の流れる音と硫黄の臭気が鼻をついた。このときも噴火の前兆とは予測せず、「夏の長雨のせいで、これほど標高の高い



11時53分、噴火の直後。噴火とはまだ知らない

地点でも地下水が流れているのだ。地獄谷から硫黄の臭気が風に乗って来たのだろう」と解釈してしまった。第二の反省点である。

石室山荘、9合目、覚明堂と順次撮影して稜線の一角に出た。王滝頂上、剣ヶ峰、二ノ池への分岐を過ぎ、50mほど登った地点で、前方に見たことのない雲が発生した。反射的に首に掛けていたカメラでシャッターを切った。一瞬の出来事だった。デジタルカメラは秒単位で時刻を記録するので、11時53分と後で分かった。

撮影した瞬間、火花が爆発するような音がし、噴火と察知した。周囲の登山者は「逃げる、逃げる！」を連呼、皆引き返した。私は、さらにもう1枚撮影した。

容易ならぬ事態に遭遇したと覚悟を決め、まずザックからダウンベストと長袖シャツを出し、背中を保護するためザックの横にくくり付けた。背中面積を少しでも広くしたいと考えた。少しでも下へ、遠くへ移動すべきと自身に言い聞かせ、往路をひた走った。

6分後、すでに細かな噴石がパラパラと頭へ降り注ぎ始めたので、ほとんどの人は覚明堂へ避難した。

私は、最後のシャッターを切った。急いでカメラをザックに収納し、SDカードをカメラから抜き、左手に握った。少しでも下を指指そうと走った。けれども、9合目地点でどうとう噴煙に追いつかれ、漆黒の闇に包まれた。それでも、勢い余って大きな石にぶつかり、しやがみ込む格好で止まった。

近年、私はフィルムからデジタルカメラに替えたので、星や夜景を撮影する機会が増えた。暗闇の中では、秒数を数えて撮影のオンオフをすることが常なので、このときも無意識のうちに数を数えた。自分を落ち着かせる目的もあったと思う。数えながら五感を研ぎ澄ませて、体感するすべてを頭に記憶しようとした。風圧が胸を締め付け、呼吸することさえ困難なときもあった。降灰や噴煙が口の中へ容赦なく侵入するので、Tシャツを腹からまくり出し、それを持って口に当てた。布を通して鼻から呼吸するように心がけた。右側から熱風が5〜8秒間隔で襲い、左からは扇風機のような冷気が2秒ほど吹いた。それらが交互に、断続的に続いた。石が岩に当たる激しい音や、稲妻が走った。遠

くではガランゴロンと石の転がる音もした。

600を数えたとき熱風が治まり、足元が明るくなったので立ち上がってみた。新月の夜のような微光の中だった。足底で大地をドスンドスンと踏んでみた。スタンスはしつかりしていた。登山道の両脇を仕切るロープは、ポール部分は約50cm、弛んでいる箇所は降灰に隠れて見えない所もあった。これ以上積もったらルートが不明になり、下山できなくなるだろう。

5mほど下った所で再び降灰が激しくなつて、暗い噴煙に閉ざされた。2回目の方が最初より激しく、頭から肩にかけて針が刺すように痛かった。噴石の嵐という感じだった。雷鳴が激しく轟き、熱風は凄まじかった。私は死を覚悟した。数秒後か、5分後か、10分後か、それは分からない、必ずそのときが来ると悟った。死を前にして私は何をなすべきか……。それを真剣に考えた。撮影した画像を残すべき、と答えが出た。その瞬間が来たら飲み込もうと自分に言い聞かせ、その瞬間をじっと待った。

10分ほど経ったとき、足元が明るくなったので立ち上がった。左

下から懐中電灯を回すのを発見、そこが石室山荘だと認識でき、一目散に走った。山荘ではヘッドランプを点けた登山者が何人かいて、煙がもうもうと立ちこめていた。主人らしき人がタオルを配り、その後を女性が「よかったら、水をどうぞ」と言い、ペットボトルを手握っていた。「持っていますから」そう言つて、私はザックから水を出して口に含んだ。タオルをマスク代わりにして口と鼻を縛り、態勢を整えた。

次々に登山者が入つて来て、そのたびに戸が開く。明るくなった。飛び出そうとチャンスをうかがった。5分ほど後、満月の夜くらいに明るさになったので、私は迷うことなく外に出て、そのまま8合目方面へと下った。ときどき登山道脇の降灰に隠れたロープをストックで持ち上げつつ、鉛色の大地を走った。かなり急斜面だったが、滑落などの心配はなかった。けれども、鉛色の大地のように、ぼんやり見える光景は異様だった。

8合目半あたりに差しかかると、左手に雷鳥が2羽いた。さらに5mほど下に大きな雷鳥がもう1羽いて、私に近づいてきた。「クウー

ン、クウー」と子犬が飼い主に甘えるような声で鳴いた。私は驚いた。雷鳥は天敵を威嚇するように「グエー、グエー」と、大きな蛙のように鳴くことを知っていたからだ。私は「大丈夫だよ」と、雷鳥に言った。雷鳥は私の前まで来た。腰を低くして、雷鳥の目線でもう一度「大丈夫だよ」と言った。なんとも去りがたい気持ちで雷鳥と別れた。しかし、雷鳥がいるということは「ここは安全圏なのだ」と、生きて還れたことを感謝しつつ、8合目へと緩やかな道を急いだ。

あれから1年が過ぎようとしている。幸い私は九死に一生を得て生還できたが、尊い命を落とされ



11時59分18秒、噴煙が50mに迫る。降灰が降り注ぎ出す

た方は58名、心からご冥福をお祈り申し上げたい。いまだ不明の方は5名、関係する皆様方のご心痛はいかばかりかと、お見舞い申し上げます。

生還できた私は、報道関係の方からの、体験したことをありのままに伝えてほしい、という質問にお答えし、撮影した写真も提供した。

これから火山活動が治まったとしても、入山する際はそれなりの準備と心構えを持つと思う。たとえ噴火という暴君の顔を垣間見たとしても、御嶽山の大自然から学ぶことや、計り知れない恩恵があることを先人から受け継いでいる。葉草や野草といった山の幸、三ノ池の御神水など数え切れない恵みがある。御嶽山を入山禁止や立ち入り禁止にしないで、多くの人が利用できる形で、危機管理の方法を多方面の方と模索し、安全登山への道筋を立ててもらいたいと願う。そして、登山者一人一人が、いかなる山も常に安全ではないことを自覚し、それなりの準備と、そのときに備えてのトレーニングや、自己責任に基づいたノウハウを学んでほしいと願わずにはいられない。

(山岳写真家)

創立110周年記念事業

登山・学術分野の進捗報告と、
山麓の氷河調査行へのお誘い

創立110周年記念事業実行委員会は、これまで23回の委員会を終えた。ここでは登山と学術に関わる、いままでの主な取り組みとこれからの計画を列記する。

海外登山分野では、昨年4月のチュール・最東峰(埼玉支部)、6月のインド・ヒマラヤのピクシー峰初登頂(東海支部)とつづき、8月には学生部女子隊によるマンセイル峰初登頂が成果を上げた。本年3月のガンガプルナ北稜隊は登頂には至らず、7月のウルタルII峰隊も残念ながら途中敗退となったが、いずれも隊員に事故はなかった。

8月には学生部ネパール東部、カンチェンジュンガ山群隊が発売した。またこの後、アピ南西壁平出和也、中島健郎、三戸呂拓也、東部ネパールPandra東壁、Tashar II南東壁(谷口けい、和田淳二)などの隊の成果が期待されるところである。来年春には関西支部の東ネパール登山隊が計画されている。学術調査分野では、クーンブ地域におけるゴジュンバ氷河の氷河

後退とネパール大地震の氷河モレインへの影響調査隊に期待されているところである。また、インドネシア(イリアンジャヤ)踏査隊が計画中である。

なお、ゴジュンバ氷河調査隊は、5名による学術調査小委員会の数回にわたる審査の結果、実行委員会で承認されたもので、詳細は後述の大森弘一郎会員の記事を参照してもらいたい。

(110周年記念事業委員会)

*

JACの110周年記念学術調査「ゴジュンバ氷河GLOF調査」の許可が下りました。予算的には絞られています、工夫して成果を上げます。来年の5月のプロジェクトです。JACから生まれた山の自然学クラブという会員が起案した計画です。これに参加期間を3週間にした調査体験のサポート隊の計画を加えました。参加者を募りますので、「山に登らない登山」の価値を想う方のご参加をお待ちしています。

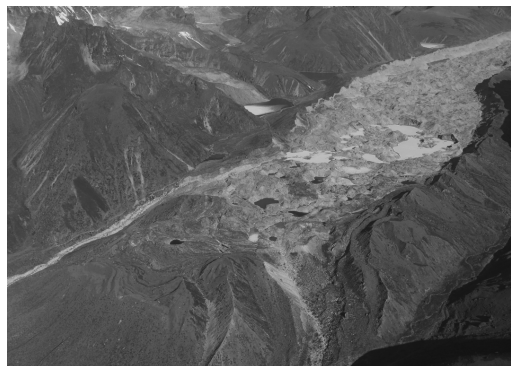
「山」とは……地形の高い所だけではなく、その人にとって目指す挑戦の対象はすべて「山」である、と私は意識しているのです。「心の山」という考え方もありますが、今回はもう少し具体的に、科学的貢献が目的です。

この調査には5週間の要し、作業もハードですが、計画の前半の3週間の楽しい部分に参加できるのがサポート隊です。中部大の福井弘道先生や防災研の井上公先生が中心メンバーですので、帰るまでには氷河学者になってください。エベレストの近くにゴジュンバ氷河があります。チョー・オユーから真つ直ぐ南に延びた大きい氷河ですが、私は偶然の出会いから関心を持つようになりました。

誰にでも目につくこの大きい氷河は、いま変化の節目にあります。私が初めて1974年に写した写真を拡大すると、小さい池を数個確認できました(合計で約2ha)。これがさらに約30haに大きくなっています。表をご覧ください。これはこれからどのような変化をするのでしょうか。100haになるのでしょうか。

当然、氷河全体の氷の減少をサ

イドモレイン調査で知ろうと思います。

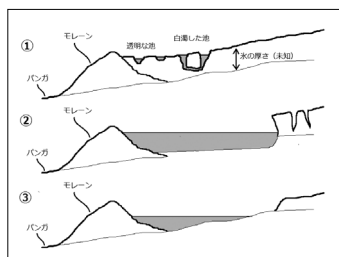


2009年撮影の氷河の状態

この氷河の変化は地球温暖化という人類にとって最重要の課題に対するセンサーです。山好きとして、これを調べて役に立ちたい。さらに100年に1度の大地震が残した影響も調べ、いつか起きる次の地震にどう対処しておくかも考えたいと思うのです。

気象変動のほかのデータと対比できる氷河のデータを現地得て、衛星画像やドローン撮影、池に舟を浮かべての水深測量で、氷河の変化を読み取りたいのです。将来、大きく危険な氷河湖ができないだろうか、できるとしたらこれを防

	1974	1984	1982	1992	2007	2010
氷河池の表面積 (ha)	2	—	—	7以上	15以上	31
S. S. hompson 面積 (ha)	—	4	6	—	17	30
氷河池の体積	不明	不明	—	不明	不明	不明



げるだろうか。

氷河の変化は時としてGLOF(氷河湖決壊洪水)を引き起こします。今回のネパール大地震では無事でしたが、もし氷河湖決壊が起きると湖全部の水が流れ下ります。幅1km、長さ1km、高さ1000mの1億tの水が短時間に流れると、下流で幅が広がり、津波のように多数の住民に災害を及ぼすのです。

ゴジュンバ氷河の氷河湖が、安定した湖となるのか、GLOFの発生源となるのか。また、地球の変化の調査への参加のお誘いです。

ゴジュンバ氷河はチョー・オユーやギャチュン・カンの南に広がる約100平方kmの涵養域を持ちます。年間の降雨(雪)量を2000mmと仮定すると、年間2億tの水(雪)が流れ下っていることになります。これは一時氷河にストッ

クされ、最終的には水となって流れます。山はその一時的にストックされた水によって荘厳なのです。

山の基礎の部分で動く氷河の末端も大切で、今回の地震でどのような影響を受けたかを知ること重要です。氷河という、山の価値を造っているものをとらえることも、登ることと同じく有益であろうと思うのです。

頂上は点です、登る過程は線です、見える山は面であり、山の本体は体積です。そう考えてみましょう。それに変化の時間軸が加わります。4つの軸を指すこと、心は四次元に立つことになります。

氷河の後退の2つの例を図に描きます。①は現在の模式図。②では、湖が拡大するにつれ、湖底は平らになり、氷河は上部で削られ、雪壁が高くなっています。あるとき大きい氷の崩壊が起きると、水面が急にながってモレーンの堤を越えて流れ、それが引き金となってモレーンを削り、GLOFを起こすのだと考えられます。地震が引き金になる可能性もあります。③は、安定した湖ができたときの安全な姿です。

③の状態が望ましいのですが、

②が予測される場合は対応が必要です。この調査が1回で完結するのか、長期の観測が必要なのかは不明です。

氷河の上を空撮写真でよく見ると、苔のように褐色の所があります。氷河の表面に残った土の層に生えたものです。つまり、その落葉低木の年輪と分布を見れば、氷河の変化がわかるはずです。氷河にはまだまだいまは気づいていない情報が含まれているので、それを調べる楽しみがあります。

まずドローンで空撮、次に電波探査機で氷の中の岩石を、ゴムボートを池に浮かべて音響探査と錘紐で水深を、ALOSの衛星画像

で広域を、チャドテン(5065m)の頂上に観測定点を作って変化を、と全力投入を考えています。サポート隊にはこれらの前半を楽しんで経験していただく計画です。ヘリコプターを使うことも考慮中です。

チャドテンに観測点を作ってから俯瞰したり、パンガを根城にして氷河を歩き回って「JACの未来への貢献」をしたい。これが私の提案する、皆様と登りたい「山」です。参加者を募りますので、希望者は zero@qb3.so-net.ne.jp 大森に連絡をください。詳しい資料をお送りします。

(大森弘一郎)

行動計画(サポート隊)

- 4月22日 全隊、羽田発
24日 カトマンズ→ルクラ→ナムチェ→キャンツマ(3550m)→ドーレ(4040m)→30日パンガ(4480m、調査基地)着
- 5月1日 チャドテン(5065m)往復、観測定点建設(すべてテント泊)
2日 ゴーキョ(4750m)、氷河サイドモレーン調査
3日 フィッシュレーク(宿泊)、エベレスト遠望・ゴジュンバ氷河上部観察。サイドモレーン調査→パンガ(以上は全員同一行動)
4日 フィッシュレーク周辺調査・希望者は5thレクへ。フィッシュレーク泊
5日 →パンガの調査基地(氷河上)
6日 氷河湖調査
7日 パンガ発・サポート隊撤収(状況によりヘリ使用)。本隊は調査継続
9日 ドーレ→ルクラ
10日 ルクラ発、12日カトマンズ発、13日羽田着

●本隊、隊員構成 隊長：大森弘一郎、副隊長：福井弘道(中部大学教授)、隊員：三方一澤(医師)、井上公(日本防災科学研究所)、修士課程の学生数名

●サポート隊、隊員構成/未定

●サポート隊参加費用/49万円

「山の日に向けて」山を考える④

日本の山の美しさ その2

小泉武栄

日本の山岳美を代表するもうひとつの要素は火山である。火山も多様性がきわめて高い。富士山のような均整のとれた成層火山があるかと思えば、霧島山や八甲田山のようなたぐさんの峰からなる火山もある。カルデラもあるし、火山湖もある。立山の弥陀ヶ原のような火砕流台地や溶岩台地もある。なだらかな山頂に湿原を載せる火山も、東北・北海道を中心に各地に見られる。浅間山や阿蘇山などは常に噴煙を上げ、明治以降に噴



噴煙を上げる御嶽山(2014年9月27日撮影。長野県警ホームページより)

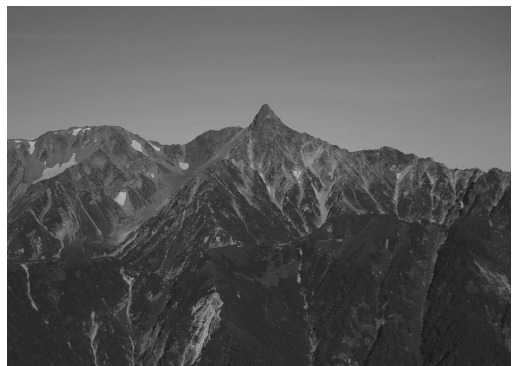
火した山は、十勝岳、北海道駒ヶ岳、蔵王山、磐梯山、御嶽山、三宅島、霧島山など、30余りを数える。日本には32の国立公園があるが、その3分の2に火山がある。大雪山、阿寒、十和田八幡平、日光、上信越高原、富士箱根伊豆、白山、大山隠岐、阿蘇くじゅうなどが該当し、わが国の美しい風景の中で火山の占める割合がいかに大きいかがよくわかる。百名山の4割は火山が占める。



浅間山の天明(1783年)の噴火でできた鬼押し出し
(<http://www.yunphoto.net>より。Photo by (c)Tomo.Yun)

して大きな被害をもたらす。浅間山の天明の噴火や1888年の磐梯山の崩壊はその顕著な事例である。近年では伊豆大島や八丈島、御嶽山などで被害が出てしまった。しかし、噴火の多くは一過性で、後に風光明媚な風景や温泉、特異な火山植生などを残してくれる。天明の噴火では鬼押し出しの奇岩、磐梯山の崩壊では裏磐梯の湖沼群が生まれた。

地質が変われば、地形や植生も変わる。山を造る岩石は、明治以来、ずっとその場でできたものだと考えられてきたが、1970年代以降、新たな研究が進み、たとえば、南アルプスを構成する四十層という地層に含まれる玄武岩や石灰岩は、はるばる南太平洋のイースター島あたりで生まれ、太平洋の底を1億年近い年月をかけて動いてきて、日本海溝の底で砂や泥と混じり、日本列島に付加したものであることが明らかになった。同じようにもつと古い地質も、大半がやはり南太平洋の海底起源であることが明らかになった。キタダケソウの生育地は北岳の石灰岩の岩壁に限られるが、それを造る石灰岩も南太平洋起源である。



176万年前に噴出した岩石で形成された槍・穂高連峰

北アルプスでの調査も進んで、槍・穂高連峰を造る岩石が、176万年前に噴出した溶結凝灰岩であることも明らかになった。凝灰岩は巨大なカルデラの内部を埋めるように堆積したが、その後の浸食で内部構造が現れ、現在の槍・穂高の地形を造っているのだという。このような壮大な物語は日本の山の価値を高めるものであろう。地質、地形、植生などのつながりを見ながら登る登山は実に楽しい。山の日の制定を機会に、こうした新しいタイプの知的登山が定着することを期待したい。

※参考文献 小泉武栄『日本の山はなぜ美しい』(古今書院)

「山の日」メモー

各地で祝日制定記念の催し

1年後の国民祝日実施に向け、この夏、プレ・イベントと位置づけた催しが各地で開かれた。そのなかから大分・くじゅうの制定記念祭、谷川岳と県庁の2会場で企画した群馬、6月第1週恒例の県民集会に続いてフォーラムを開催した広島からの報告を紹介する。

【大分】地域行政との連携に道

国立公園内の長者原園地で開催された制定記念祭の式典は主として大分県が担当し、地元の九重町は自然道歩きの九州オルレ、竹田市は親子登山といったように地域行政が役割を分担してのイベントだったようだ。「山の日」づくりで連携した日山協などの山岳団体からも本部・支部役員が参加した。

獅子舞太鼓で始まった式典は、広瀬勝貞知事、全国「山の日」協議会の谷垣禎一会長、超党派議員連盟の衛藤征士郎会長挨拶と続き、県内外の児童生徒から公募した山へのメッセージが読み上げられた。歌手の芹洋子さんのリードで「坊がつる讃歌」「山は心のふるさと」

を会場のおよそ300人が合唱した。場所を替えた会場で、大分県山岳連盟と当会東九州支部の主管で親子登山が実施された。

地域の行政と民間が連携し、持ち回りで行なう予定の祝日イベントは、来年8月11日の施行本番からスタートする。来夏の開催地は長野県松本市(上高地)と決まっている。地域の特性を活かしながらも、全国集会的な性格を持つ祝日行事の準備がすでに始まっているようだ。

地方自治体が中心になることで、山岳団体だけでなく農林行政や自然保護、観光等のあらゆる分野がつながりやすくなると思われる。当会の各支部で「山の日」関連事業を企画・運営する際にも、地域の行政や関連組織との連携に好影響を与えるだろうと感じた。

(大久保春美)

【群馬】展示・相談・登山と多彩

群馬支部では「ぐんま山フェスタ2015」(上毛新聞社共催)と「谷川岳山の日制定記念プロジェ

クト」(山岳団体も加わる実行委員会主催)の2事業に取り組んだ。「山フェスタ」は群馬県庁1階のホールで開かれた一般県民向けのイベントで、今年で2回目。8月7日からの3日間、県内の登山・ハイキングコース紹介をメインに開催された。参加者はざっと2700人だった。

わが群馬支部は群馬岳連、群馬労山とともに今年初めて後援団体として参加した。相談コーナーでは様々な質問に答え、会のPRにも努めた。

最終日の9日には当支部に所属する会員5人に佐藤光由・岳連理事長を加えたメンバーが「群馬の



田中群馬支部長らによるパネル・トーク

山の素晴らしさ」をテーマにパネル・トークを行なった。

谷川岳では登山や一ノ倉沢での岩登りが、また、山麓の水上温泉では服部文祥さんが講演するなど多彩な企画が実施された。

(根井康雄)

【広島】充実したフォーラム

「山の日」フォーラムひろしま2015」が8月11日午後、広島市の中央生涯学習センターで開かれた。当会の広島支部や広島岳連が加わっている、ひろしま「山の日」県民の集い実行委員会と中国新聞、中国放送が主催した。参加者は300人。全国「山の日」協議会を代表して尾上昇副会長が挨拶し、祝日制定の意義を強調した。《身近な山に出かけよう》をテーマにしたパネル・トーク(司会Ⅱ萩原浩司)は、山や森の大切さを理解し行動する人の輪を広げようとの趣旨を、4人のパネラーが各様の視点や体験から話し合う充実した内容で、参加者を惹き付けた。

6月の第1日曜日に行なわれる恒例の「県民の集い」とは別に、祝日施行1年前のプレ・イベントとして企画された。

(成川隆顕)

第35回日本登山医学会開催される

第35回登山医学会会長 香川大学・白杵尚志

2015年5月23・24日、高松市サンポートホールにおいて、第35回日本登山医学会を、日本山岳会の後援を得て四国初の開催をした。参加者は192名であった。大会のテーマは「その向こうを見るために」であった。山頂を目指す登山者の思いと研究の完遂に臨む研究者の気持ちを併せ考え、抽象的ではあるが、この言葉を選択した。大会は会長講演からスタート。

「私が山の診療所からもらったもの」との題で、38年間携わってきた三俣診療所について話した。その中で山岳診療所・救護所を対象とした13年・14年のアンケート調査についても言及。各13施設・17施設から得られた診療実績で、受診者数1965名・2125名、重症症例搬送数17名・16名などの集計結果と現在の各診療所が抱える問題点等について報告した。

シンポジウムは「登山の安全と健康保持のため、山の天候を考える」であった。山で発症する疾患や事故が天候と無関係ではないこと、遭難者搬送の可否も天候に大きく

左右されることからこれを選択した。山岳気象予報専門の会社を経営する猪熊隆之氏から「山の天候の特徴・山系による違い」、山荘への天気予報を配信している天気予報会社代表である越智正昭氏から「ハレックス社における山岳気象情報提供の取り組み——これまでとこれから」、山岳ガイドで気象予報士でもある森田秀樹氏から「山で、雷に遭遇しないために」と題する講演が行なわれた。本邦初公開であるネット配信画像供覧から観天望気まで、幅広い内容が提供された。

特別講演では現在制作中の高山病ガイドラインについて、編集責任者である花岡正幸氏から「山岳診療の標準化を目指して——日本登山医学会高山病診療ガイドライン」が報告された。主要部分について、その背景にある情報と文言に含めた意図の説明をした。日本人に相応しいガイドラインの完成に向けて注目を集めた。

教育講演は、論文執筆の基礎について編集委員長である奥宮清人



公開討論の様子

氏から「若手研究者に向けた学術論文の書き方」が行なわれた。学会誌へ向けた、学術論文に仕上げる手法についてであった。

昨年の御嶽山噴火に関する緊急報告として大城和恵氏から「御嶽山噴火救助活動の聞き取り調査から」が行なわれた。今後このような災害に対して、医学がどう関わることができるのか、再考を促した。

39の一般演題は、8つのテーマ（生理、循環、高山病、運動器、安全・調査報告、低体温・山岳医療、呼吸、順応）について実施した。質疑応答は個々のテーマについて別会場で実施し、討議時間帯の同会

場は活況を呈した。

締めくくりは、「再考、山岳診療所の現状と課題——ネットワーク構築過程の中で」。全国の山岳診療所のうち18施設からの参加を得て、現在の問題点抽出や相互の情報交換と、明日への展望について言及された。それぞれの施設が多くの問題を抱えているにも関わらず、「この活動はあくまでもボランティア活動であっていいのでは」との発言があった。この言葉に多くの賛同が寄せられ、山岳診療を支える方々からの心強いメッセージと受け取れた。また、重度高山病例のデータ蓄積に関する提案もなされた。

24日午後には市民公開講座「世界最高齢エベレスト登頂」を支えた日本の登山医学」を開催。三浦雄一郎氏、登頂を支えた高山守正氏、大城和恵氏・山本正嘉氏の座談会形式とした。会場には約250名の聴衆が集まった。3回のエベレスト登頂に関係する健康面や体力面での特徴、氏の経験や思いなどが披露され、それらを科学的に考察するデータも提示。一般登山者にも有益な情報提供の場になっていれば幸甚である。

創立100周年記念事業

日本三百名山登頂シリーズ②報告

上信越4座 笠ヶ岳・横手山・
岩菅山・白砂山

輪湖建雄

長野県生まれなのに、中信（松本）育ちの小生は東・北信方面をほとんど知らない。日本山岳会の本企画を見つけ、早速2泊3日の山旅に参加することにした。

1日目（笠ヶ岳、横手山） バスで笠ヶ岳峠に到着したのが12時。峠からわずか30分で山頂へ。あまりにも短い。地元ガイドによれば、崖崩れなどいま登れるのはこのルートだけとのことだったが、少



八間山の分岐付近で。バックは白砂山

なくとも5座はある同じ笠ヶ岳の中では、最も容易な山だろう。横手山への途中で見た笠ヶ岳は実に美しくかつこよい。登る山より眺める山の部類か。

横手山は、「のぞき」からスカイレーターとリフトであつたという間に頂上へ。「こんなの山ではない」とだれかが言っていたが、まさにそのとおり。でも、山は万人のもの、たまにはよいではないか。地図にも載っていた「日本一高所にあるパン屋」の味は、そう特別のものではなかった。罪滅ぼしのつもりか、山頂から洪峠まではゲレンデを歩いて下山。太平洋と日本海を分ける中央分水嶺に立つホテルの、長野側と群馬側の屋根の非対称さが面白い。

登山とはいえないような2座ではあったが、梅雨明けの好天に恵まれ草津白根山や榛名山、それに富士山も視認でき素晴らしい眺望であつた。物足らなそうなメンバーを見て、ツアーリーダーが蓮池から琵琶池、水無池までの散策を提案。濃い緑の樹陰を歩き、志賀

高原らしさを味わった。紅葉の時期ならばもつとすばらしいだろう。

2日目（岩菅山）「信州山の日」

（7月第4日曜日）に、高天ヶ原から登山開始。試運転で動き出したリフトを横目で恨めしげに見ながらスキー場脇に登る。足元のタテヤマウツボグサの濃い紫花が鮮やかに映った。寺子屋峰付近まで登ると北アルプスの全貌が望める。

後立山、槍・穂高連峰、立山連峰など、鹿島槍の双耳峰もくつきりと見えた。遠目ながらこれほどの感動を味わったのは久しぶり。ノツキリまでの炎天下の登り下りにやや時間を要したが、正面に見えてくる岩菅山の雄姿はさすがと思わせる。最後の登りに喘ぎながらも絶景の山頂に立った。いまだき珍しいが、東京から来た中学1年生100人近くの大集団登山と出会った。都会っ子には一生の思い出になるだろう。

3日目（白砂山） 野反湖畔登山口から6時登山開始。今日も快晴ながら、樹間を進むため比較的涼しい。垣間見える浅間山や白根山それに野反湖の青さが印象的。地蔵山を経て堂岩山まで登ると白砂山が見えてくるが、かなり遠くに

感じる。樹林帯から笹藪に変わり、炎天下のアップダウンはかなりのこたえる。それでも全員無事登頂できた。やや奥深いせいか登山者はさほど多くはない。どちらかというと玄人向けの山か。二百名山の一つ佐武流山が間近に見えたが、どこかと思うほど地味な山の様子。下りはペースが落ち、帰りの時間を考慮して当初予定の八間山経由を省略したが、ツアーとしては正解だったと思う。ともあれ4座登頂を達成でき、かつ温泉旅行のよいうな贅沢を十分に味わえた山旅であつた。

日本山岳会 第32回全国支部懇談会

―鮮やかな早春の越後の山へ―

主催 公益社団法人 日本山岳会
越後支部

期日 平成28(2016)年4月9日(土)・10日(日)

宿泊 岩室温泉「ゆもとや」(新潟市西蒲区 上越新幹線燕三条駅より車約30分(無料送迎バスあり))
参加資格 日本山岳会会員(会友を含む)、および関係者

参加費用 1万6000円(1泊3食付き・二次会・親睦登山込み)

申込み期間 平成27年10月15日(木)～平成28年1月15日(金)

日程

4月9日(土)

受付開始 12:30 越後支部と新潟県山岳協会と共催の写真展開催 開会式 13:30 1階やひこ館 講演会 14:00～16:30 「山・人・酒」講師・平田大六氏「日本の北限で生息する火打山のライチョウについて」講師・長野康之氏 自由時間 16:30 入浴等 交流会 18:30～20:30 やひこ館 交流会、各支部紹介 アトラクション「新潟県民謡 雲雀 竹延一座」(新潟銘酒でお楽しみください) 二次会 20:30 2階かくだ館(御自由)に楽しみ下さい

4月10日(日)
朝食 6:30 やひこ館

親睦登山

《Aコース 7:30》 弥彦神社参拝 八枚沢登山口 弥彦山頂 大平山公園(高頭仁兵衛翁寿像) 多宝山 石瀬峠(車で宿に送迎) 定員35名 標高差約494m

《Bコース 8:00》 弥彦神社参拝 西生寺(裏参道旧コース) 妻戸尾根分岐 弥彦山頂 大平山公園 大平山公園駐車場(車で宿に送迎) 定員65名 標高差約520m

《Cコース 9:00》 弥彦神社参拝 国上寺参拝 西生寺参拝 弥彦スカイライン 清水平散策 大平山公園 宿 定員35名 申込み・問合せ先 全国支部懇談会越後支部事務局 小山一夫 〒950-0202

新潟市西区小針1-21-4
TEL・FAX 025-265-4417
携帯 090-5219-7432
✉ koyama21825@yahoo.co.jp

*支部またグループでまとめて申込み下さい。
解散 4月10日(日)14時 ホテルで解散予定。

*募集要項は越後支部のホームページに掲載しています。

活動報告

集会所委員会

八ヶ岳にツクモグサを訪ねて

梅雨の合間を縫って6月13、14日で八ヶ岳にツクモグサ探索に行ってきました。集会所委員会の企画で私は初めての参加です。

当日朝、茅野駅の改札前に集合し、タクシーで登山口の桜平に向かいました。参加者は男性7名、女性2名で合計9名です。桜平から夏沢鉱泉に向かう途中でクラシックなスタイルのご老人と会い話をすると、今日は硫黄岳山荘のタルチョ祭で、飾る旗を持って夏沢鉱泉まで行くとのこと。タルチョ祭ではコンサートがあり、地酒が飲み放題との情報で、皆しめたと云った感じです。オーレン小屋からは夏沢峠経由ではなく赤岩の頭に登るルートをとりました。いまの時期は直射日光を浴びることがな

いので快適なルートです。

赤岩の頭で圧巻の横岳西壁を見ながら昼食を済ませ、長い休憩の後、稜線を硫黄岳山頂に登りました。山頂で記念写真を撮って今日の宿泊地硫黄岳山荘を目指し、20分ほどで山荘到着。荷物をデポし、男性陣だけでツクモグサ探索に横岳方面に向かいました。雲が出て少し寒くなってきましたが、横岳山頂まで一気に登りました。途中、キバナシヤクナゲが疲れを癒してくれます。山頂から杣添尾根分岐近くまで行きましたが、ツクモグサはもう時期が遅く見ることはできません。代わりにウルップ草が青い花を咲かせていたので写真に収め、山荘まで戻りました。

タルチョ祭のため夕食は豪華でお酒も飲み放題です。さすが日本山岳会、山荘の社長から我らがリーダーに乾杯の音頭をと依頼があり、征矢さんの発声で大宴会が始

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

まりました。皆ほろ酔い気分になったところ、歌声喫茶の開演です。「山小屋の灯」や「青い山脈」などを合唱し、大いに盛り上がりつつ就寝となりました。

翌朝は夏沢峠経由で本沢温泉まで順調な下りです。途中、日本最高所の露天風呂を道下に見てすぐに本沢温泉に到着して小休止。その後九輪草の群落を愛でながら緑池経由で稲子湯に下りました。鉱泉で汗を流した後、美味しい蕎麦と地酒に舌鼓を打って皆満足し、バスで松原湖駅に向かいました。自分は初参加でしたが、終始笑い声の絶えない楽しい山行でした。また参加させていただく日が楽しみです。(山梨支部・小宮山千彰)

岩手支部の皆さんと歩いた「花と秘湯の山旅」裏岩手と八幡平

山行は7月10・12日、東京地区プラス北海道、愛知、静岡からも参加者があり、合計16名に岩手支部からの8名を加え、総勢24名で挙行されました。ホスト役全員の祈願のお陰で、3日間、超快晴の天気に恵まれました。私にとって



谷岳山頂で記念撮影

は今年1月に日本山岳会に入会して、初めての参加です。

盛岡駅で集合して少しずつ和み合い、八幡平で出迎えてくれた岩手支部の会員と合流してからは、山という共通点があるので、歩きながらの会話も弾んでいきました。初日は八幡平から茶臼岳までほんの2時間の歩きと計画書にあったが、5割増しの3時間は歩きまわった。登山道では多くの高山植物が見られたが、なかでも純白のキヌガサソウが見事でした。初日の宿は松川温泉の峡雲荘。入浴の後はお待ち兼ねの夕食。菅原支部長の愛嬌たっぷりの挨拶の後開宴。宿の社長がJAC会員とのことで夕

平成27年度(後期)「海外登山助成金登山計画」募集 海外登山助成金審査委員会

公益社団法人日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山助成金」による助成を行なっています。

第34回目となる今回も、極限探究、新しい課題への挑戦、発想の新しさ、夢多き計画など、創造的でユニークな登山計画を支援したい、と考えています。

会員資格やパーティ編成等の条件は問いません。学生や若年クライマーも奮ってご応募ください。

記

- 対象 平成28年2月1日～平成28年7月31日に海外の山へ出発する登山隊。
- 申込み方法 所定の様式(事務局にご請求いただいても結構です)に記入し、登山計画書(15通)を添えて申請してください。
- 申込み締切 平成27年12月15日(当日消印有効)。
- 審査と助成期間 平成27年12月中旬に審査し、理事会で決定、助成。なお、助成対象となった登山隊は後日、報告書の提出を必ず願います。日本山岳会の会報「山」に掲載します。
- 問合せ・申込み先 日本山岳会事務局 ☎03-3261-4433

食にはビールの差し入れを、また岩手支部からは幻の酒《鷺の尾》ほかの飲み物が振舞われ、時間を忘れた交流が続きました。別室での二次会も遅くまで賑わったらしい。翌日は再び快晴。今回の山行のハイライトである籐七温泉から畚(モッコ)岳を経由して松川温泉に至る、正面に岩手山を望む縦走です。宿で準備していただいた昼食はコンビニのおにぎりの1・5倍のボリュームがあり、塩の効いた美味しいものでした。炎天下での

歩行には水分補給も大切。道中には何カ所かに冷たい湧水があつて、疲れをいっぺんに吹き飛ばしてくれました。2日目も多くの高山植物に遭遇したが、淡紫色のシラネアオイが最も印象に残りました。7時間の歩きの後下山した松川温泉からは樹海ラインを車で籐七温泉へ。彩雲荘の野性味溢れる露天風呂で汗を流し、夕食は山菜主体のバイキング。お腹を空かせた山男たちは食事をとっていると、待ち切れず

に「練習」と声に出しビールをグーッ。何回かの練習の後本番の乾杯。この宿の社長もJACC会員で、送迎を含めいろいろと便宜を図っていたいただきました。

3日目は蓬莱境散策の後、盛岡駅へ出て解散。「みちのくのそ

のまた奥に 聳え立ち 我らに微笑む 南部片富士」。参加者は皆満足して家路につきました。お世話いただいた岩手支部の方たちに心よりお礼を申し上げます。

(静岡支部・長野和義)

支部



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

だより

東九州支部 3年目に入ったシカの食害調査

去る6月6日(土)、大分県植物研究会との共同作業のスズタケ枯死とシカの食害調査作業が、本谷山西の稜線で行なわれた。平成23年6月1日(土)に1回目の調査を行なつて以来、10月と6月の年2回の観測調査は3年目に入った。

この稜線に入るたびに感じる稜線の木々の寂しさ。もうすっかり樹木の枯死が進んでしまっている感じだ。しかし、しつかりしたデ

ーターはどこにもない。スズタケの枯死も同じだ。枯死が進んでいるのは明らかだが、しつかりしたデータとしてはない。これをまですでるだけデータとして残すのが我々の役割だろう。

この日、集合場所の緒方町の道の駅「原尻の滝」に午前7時に集まったのは、わが支部会員9名、研究会や県庁の担当者などが8名。去年10月までこの調査を取り仕切っていた生野喜和人先生は、この春急逝されて、大分弁丸出しの師の声は聞こえないが、後を受けて研究会のメンバーがやってくれて

いる。

今日の調査の打ち合わせをして、7台の車に分乗して尾平トンネル宮崎県側の登山口に移動。8時30分に登山開始で、雨上がりの山道を登ること約30分、祖母・傾縦走路の尾平越の旧峠に着く。ここで定点観測班と、移動調査班とに分かれる。定点観測班は峠から約1.5km、1時間半の所に県環境企画課が設置した観測地点へ直行。ネットで囲われた中のスズタケの状況と、囲われていない場所の状況を計測する作業。

里は初夏でも標高1400mの稜線はまだ春で、スズタケの新芽も短い。ネットの中ではしつかり新芽が伸びている。しかし、ネットの外はタケの丈も短く、新芽は短く喰われているのが分かる。観測班はネットの中の方の背丈の計測から開始。

一方、移動調査班は実生の新芽の調査だ。峠から本谷山までの道の両側5m以内にある新芽の樹種とその数を記録しながら登る。高度の低い峠付近には、数多くの新芽が見られたが、高度を上げて行くにつれ、その数は少なくなっていく、スズタケがまだ多く残って

いる標高1500m付近から上はごく少ない。そうした状況を記録しながら正午過ぎに山頂着。昼食後下山し、定点観測作業を終了して昼食中の観測班と合流。稜線途中の展望岩を「喜和人岩」定点観測地を「生野観測ポイント」と東九州支部では呼ぶこととした、と発表すると拍手が起こった。午後2時に登山口に下山。解散式をして今年10月の調査時に再会を約して解散となった。調査終了を、生野先生もあの世からご覧になっていたことであろう。

(飯田勝之)

越後支部

第58回高頭祭と弥彦松明登山

越後支部公益事業の目玉である第58回高頭祭が7月25日、弥彦山大平園地の高頭仁兵衛翁寿像碑前で盛大に開催された。新潟県は4日ほど前に梅雨明け宣言したにもかかわらずずっと天候が続いていたが、毎年、高頭祭が実施される25日になると夏の青空が広がり、暑い日差しに恵まれている。今年度来賓は、6月20日の日本山岳会総会で第25代会長に就任した小

林政志会長と初の女性副会長となった大久保春美副会長をお招きし、また昨年に引き続き森武昭前会長にも参加していただいた。今年は弥彦神社御遷座百年の記念行事と重なり、越後支部会員および関係者を含め約70人の参加者が集い、成功裏に終了することができた。

14時30分、桐生恒治副支部長の開式宣言で始まり、遠藤家之進正和支部長が開会の挨拶で「5月の越後支部総会で新支部長の任を仰せ付けられました。高頭祭は越後支部の重要な伝統行事であり、多数の参加者にお礼申し上げます。今年は日本山岳会110周年の年ですが、来年は越後支部70周年となります。来年に向けてプロジェクトを立上げ記念行事を計画しており、特に来年の4月9・10日には、岩室温泉を会場として弥彦山登山の計画を進めています。」と述べられた。

遠藤支部長から今年度の来賓紹介をしていただいた後、高頭仁兵衛翁寿像前にて修祓・祝詞奏上が執り行われた。毎年この儀式は、平田大六支部名誉会員が本職神官並みのお祓いを行なっていたが、関川村村長としての公務で欠席され

日本三百名山登頂シリーズ⑥

紅葉に染まる両神山と浅間隠山に登り、伊香保温泉・黄金の湯を楽しむ1泊2日

参加者募集!

「日本三百名山登頂シリーズ」という創立110周年記念事業の山行企画第6回のご案内です。今回は上州と外秩父の日本三百名山2座に登り、名湯伊香保の湯を楽しもうというプランです。JAC会員以外の方も参加できますので、山仲間やご家族などお誘い合わせの上、奮ってご参加ください。

本ツアーには日本山岳ガイド協会のガイド資格を有するツアードーと、インタープリター(解説員)として当該山域に精通しているJAC支部会員(第6回の場合は埼玉支部)が、また、サポートとして本部集會委員会スタッフがそれぞれ同行します。

【第6回日程・行程など】

期間 11月2日(月)～3日(火)

集合解散 新宿駅西口7時集合、同18時ごろ解散予定

行程 1日目/新宿駅西口⇨関越

道⇨二度上峠⇨浅間隠山往復
⇨伊香保温泉泊 2日目/伊香保温泉⇨関越道⇨日向大谷⇨両神山往復⇨関越道⇨新宿駅西口

宿泊 伊香保温泉・石坂旅館
食事 朝1回、夕1回付き

参加費 会員⇨3万2000円

会員外⇨3万3000円

定員 20名(最少催行人数13名)

申込み・問合せ 〒160-0000

08 東京都新宿区三栄町25

番地三栄ハウス202 (株)ア

トラストレック

TEL 03-3334-10030

FAX 03-3334-19200

日本三百名山登頂シリーズ係まで
担当⇨今村

✉info@atlastrek.co.jp

*お申込みの方に詳細なご案内をお送りいたします。

(創立百十周年記念事業実行委員会/集會委員会)



松明登山隊の市中行進

ため、山崎幸和支部顧問に初めてお願いした。山崎流の修祓・祝詞の儀式は、口語体で参加者に非常にわかりやすく、日本山岳会や越後支部の現状を高頭翁に報告をしていただいた。玉ぐし奉奠は、遠藤越後支部長、小林日本山岳会会長、森前会長、大久保副会長、橋本前支部長など十数名により厳粛に執り行なわれた。

特に今回は、高頭翁の母校である長岡市立深沢小学校・中村陽子校長も参加していただいた。深沢小学校では、母校の大先輩である高頭翁の業績について、7月初めに遠藤支部長が講演を行なったこと、9月に子供たちが弥彦山登山

をする計画があることを追記しておきたい。

その後お酒を好まれた高頭翁に對し、越後支部の佐藤レイ子支部長、斎藤トモ子支部役員、原田敬子支部会員(埼玉県狭山市)、浜田啓子支部会員による女性会員からのご献酒を行なっていた。さらに地元・吉田山岳会の加藤レイ子さんの指揮により「弥彦山松明登山賛歌」と「山男の歌」を全員で合唱し、寿像碑をバックに全員で記念撮影を行なった。

一連の式典終了後、小林会長から「創立110周年を迎えた日本山岳会と高頭仁兵衛について」と言う内容で記念講演をしていただいた。小林会長の講演要旨は「日本山岳会の創設から110周年となる節目に、会長の重職を引き受けることになった。高頭翁が山岳会の財政基盤を確立していただき現在の日本山岳会がある。その日本山岳会の再生に向けて尽力して行くが、まず越後支部の盛り上がりを感じることができた。高頭祭を継続して、ますます発展させて支部の活性化を進めてほしい」と述べられた。

その後、東屋に移動しお神酒を

いただきながらひとときの懇親会となり、越後の地酒を味わいながら、小林会長、大久保副会長、森前会長を囲んでの歓談となった。16時15分ころより弥彦山頂の奥ノ院へ移動を始め、山頂御神廟前にて開催される新潟県登山祭に参加した。17時より弥彦神社神官による「登山安全祈願祭及び松明登山清め祓い」が執り行なわれた。

17時30分から山頂記念講演として、大久保副会長から「日本山岳会における女性登山の歴史」という内容で記念講演をしていただいた。

大久保副会長の講演要旨は、「日本山岳会名簿における最初の女性会員は、長岡の植村国子(クニ)であり、旧制長岡中学の第一校歌曲者として知られている。」ということを紹介されると、聴講者から驚きの声が上がリ、全員神妙に聞き入っていた。その後、日本山岳会会員の女性登山家として活躍された黒田初子氏、村井米子氏、佐藤テル氏、川森佐智子氏、坂倉登喜子氏らについて、往年の実績やエピソードを紹介していただいた。講演終了後、弥彦松明登山の開始となるが、松明登山の責任者である越後支部役員で地元・弥彦山

年次晩餐会開催のご案内

総務委員会

12月5日(土)京王プラザホテルにて年次晩餐会を開催いたします。

今年は日本山岳会創立110周年記念にあたり、晩餐会を第1部は記念式典、第2部を晩餐会とします。

*本年の催物は、アルパインフォトクラブの展示、昨年好評でした図書委員会主催の図書交換会。

*講演会は中村 保氏ほかを予定しています。ご期待下さい。

(詳細は10月にご案内状を送送いたします)

期日=12月5日(土)

場所=新宿・京王プラザホテル本館4階・5階

岳会会長である小林頼雄氏の指示により松明点燈され、弥彦山頂から松明をかざして麓の弥彦神社を目指して下山開始する。小林会長、大久保副会長、森前会長にも参加していただき、越後岳人を含め約200人強の大行列となった。夜空に舞い上がるスターマインの花火を見ながらの行進は、最高潮の気分を演出し楽しい時間帯であった。弥彦駅まで約1km強の行進を終え、松明を納めて20時45分に終了した。また、21時より弥彦公会堂でビールを飲みながら喉を潤し、松明登山の無事成功と慰労を行

なった。その後、22時ごろ宿舎に戻り、小林会長、大久保副会長、森前会長を囲んで越後支部会員有志との懇親会で親睦を深めた。

翌26日は、朝から真夏の太陽で気温が上昇し、汗が噴き出る暑い日となったが、小林会長、大久保副会長、森前会長は、長岡市深沢町の高頭家菩提寺である大滝山正林寺へ、高頭翁の墓参に同行していただいた。また、近くにある高頭家の広大な旧住居跡は現在、長岡市の管理で公園として整備され大きな石碑が建立されている場所を見学していただいた。その後、長岡駅までお送りし無事帰京された。なお、小林会長、大久保副会長には就任早々に、高頭祭に遠路駆けつけていただき、さらに森前会長も昨年に引き続きご参加いただき、紙面を借りて感謝を申し上げます。(桐生恒治)

東京多摩支部

8月から「奥多摩BC」開設

―山岳会員に広く開放―

東京多摩支部は、8月1日からJR青梅線奥多摩駅の近くに東京多摩支部の行動拠点として奥多摩

ベースキャンプ(BC)を開設、支部会員はもちろん、日本山岳会会員であれば、だれでも自由に利用できるようにした。BC利用により行動範囲がぐんと広がる。奥多摩の自然を楽しんでほしい。

「奥多摩BC」は、東京多摩支部が「設立5周年」を迎えたのを記念して設置した。木村康雄会員が所有している家屋を利用させていただく。2階建てで、主に1階部分を使用する。従来、薬局として使っていた店舗部分と居住部分2間、台所・トイレなどがある。支部奥多摩BC運営委員会が管理。奥多摩駅から5分。これにより奥多摩駅発5時台のバスに乗車できる。

●開所期間：原則、通年とする。

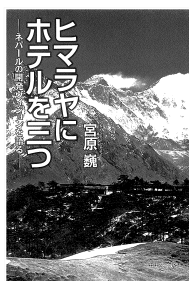
●利用料金：*1泊素泊まり料金
①日本山岳会会員1000円 ②非会員(原則会員同伴)1500円
③会員に準ず(家族)1000円 ④小学生以下無料

*宿泊なしの一時利用100円

・管理人は常駐しない。すべてセルフ・サービスとする。

・食事の提供はない。ガスはないが、カセットコンロ、電子レンジの利用はできる。

・寝具等の備えは、シュラフ数個



2015年6月
中央公論新社刊
四六判 248頁
1600円+税

世に波乱万丈の人生を送られた

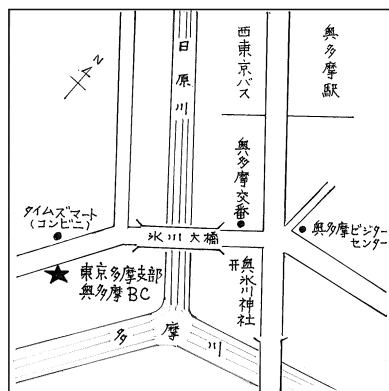
宮原 巍著
ヒマラヤにホテルを三つ
—ネパールの開発ヴィジョンを語る—



図書紹介

のみのため、利用者が持参することとを原則とする。

●申込み・問合せ 氏名、会員番号、住所、電話、利用日時、人数を明記しハガキ、FAX、メールで坂本正智宛へ 〒206-0031 多摩市豊ヶ丘2-118-102、042-373-3238
FAX 042-373-3238
✉ Okutama-be@jac-tama.or.jp
申込み後、詳細お知らせします。



話が多いが、その中に堅い信念とか、高い志が感じられると人に感銘を与える。

この度、宮原さんが『ヒマラヤの灯』『還暦のエベレスト』に続く3冊目の本を刊行された。

初めてのヒマラヤ遠征でネパールに触れて63年。私も山岳部学生のころ、自分もヒマラヤへ、この遠征の記録映画(確か「ミュールの鈴」という題名であったように

な気がする)を観にいった覚えがある。ネパールのために何かをと決意して再びネパールに渡って59年、当初は政府機関で研鑽を積み、ネパールの将来は観光であろうと、いままで「ホテル・エベレスト・ビュー」「ホテル・ヒマラヤ・カトマンズ」を建設、運営され、今度は3つ目となる「ホテル・アンナプルナ・ビュー」をポカラの景勝の丘陵上に建設すべく従事されている。この飽くなきエネルギーな活動は、ネパールへの熱い思いからであろう。こうしたなか先輩、山仲間、支援者等々の人との出会い、関係を大変大事にしていることに感心するし、宮原さんの人柄を感じさせる。

後半は、永年にわたるネパール在住、すでにネパール人として活動されている中で、ネパールの現状に対する憂い、混乱する政治に対する改革の必要性を強く感じ、2005年、「ネパール国土開発党」という政党を立ち上げ、ネパールの政党では初めてとなるマニフエストを発表し、政治改革に挑戦している。

開発計画編として鉄道敷設、チトワンへの首都移転、水資源利用

図書受入報告(2015年8月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
大國享司	カナディアンロックー : 山岳生態学のすすめ (学術選書 No.071)	311p / 19cm	京都大学学術出版会	2015	出版社寄贈
村中征也	白く高き山々へ : 六十歳からの青春 - アルプス登山と語学留学の契機	302p / 21cm	ナカニシヤ出版	2015	著者寄贈
宮原 巍	ヒマラヤにホテルを三つ : ネパールの開発ヴィジョンを語る	246p / 20cm	中央公論新社	2015	出版社寄贈
全日本山岳写真協会 (編)	山稜2015 : 2015年全日本山岳写真展作品集 (撮影地図付)	172p / 22cm	全日本山岳写真協会	2015	発行者寄贈
遠藤俊一	日本三百名山ある記	192p / 30cm	遠藤俊一 (私家版)	2015	著者寄贈
畑島良一 (編)	日本山岳会 麗山会 創立10周年記念誌	131p / 26cm	日本山岳会麗山会	2015	発行者寄贈
鈴木裕子・佐々木民秀 (編)	台湾・北大武山登山報告書 (平成24年5月7日~14日)	51p / 26cm	日本山岳会秋田支部	2015	発行者寄贈
岐阜県警察山岳警備隊 (編)	岐阜県警レスキュー最前線: Gifu Police Rescue Front Line	303p / 19cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
王栄張琰 (編)	山高人为峯: 攀登珠峰	110p / 25cm	中国地质大学出版社	2014	発行者寄贈
Jenny Paterson (ed.)	The Journal of the Mountain Club of South Africa 2013 (No.116)	166p / 23cm	M.C. of South Africa	2014	発行者寄贈
Sean Isaac (ed.)	The Canadian Alpine Journal 2015 (Vol.98)	140p / 28cm	The A. C. of Canada	2015	発行者寄贈

を通じた国土開発といった大胆な構想を盛り、政策編として象徴的存在としての王制を維持した立憲君主政体を主張し、連邦的地方自治政府構想、教育制度の充実、社会保障制度の確立等を提唱している。

そして最後に、国際援助のあり方について「際限のない援助は、人々の心をむしろ弊害さえある」との思いから、被援助国の主体性の確立を強く主張する。

全体を通して波乱に富んだ生き様にある種の羨望を覚え、若い人たちに薦めたい一書である。

（吉永英明）

クルト・ラウバー著 ブルネル淑美・西村志津共訳 マッターホルン最前線



2015年7月
東京新聞刊
A5判 256頁
1700+税

今年2015年は、マッターホルン初登頂150周年にあたる。この出来事に関わりの深い麓の町ツェルマットでは、記念の企画や

行事も実施されている。本訳書もそれにあやかった感もないではないが、原著刊行は2012年。著者ラウバーは、マッターホルン登山の基地となるヘルンリ小屋の管理人を務め、ツェルマット地域を担当する山岳救助隊の副隊長でもある人で、本書はヘルンリ小屋での1シーズン、オープンからクローズまでの出来事やエピソードをたどりながら書き綴る内容となっている。訳者後書にあるとおり「毎日のくらしぶり、実体験した救助活動の秘話、山に来る人たちの人間模様、自然の脅威、喜びと悲しみに対する理解、家族のこと、マッターホルンにまつわるエピソード」など、ラウバー氏ならではの貴重な内容である。

ヘルンリ小屋は日本人にも馴染み深い、その舞台裏を知る機会はないが、その主の語らうだけではない。山小屋として果たすべき役割、管理の仕方、マッターホルン登山と救助活動に対する関わりなど、教えられることが非常に多かった。山に最も近接する施設としての山小屋の機能は、宿泊にとどまらず、さらに積極的に

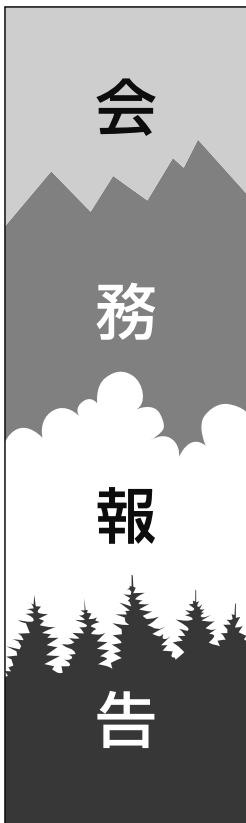
見直されてよいだろうし、救助活動をめぐるのは、その組織化の経緯と、実際の活動実態が具体的に述べられていて、遭難事故が多発している日本の登山事情を検証する際の参考に充分なり得る。

これを読むと、マッターホルン登山が、ガイド山行を基本に、実施および安全に関して周到に管理された形態をとっていることがわかる。朝の出発からして、その日の天候判断と登攀の可否、出発時間、そして地元の年長ガイドのパーティを先頭にした順序など明確なルールに従って秩序づけられている。よそのガイドやガイドなしの登山者は、その後に続いていくだけである。その方がルートを間違える危険を避けることもできる

わけで、合理的だと見なされる。登山の継続・中止の判断もガイドの全責任において行なわれる。「生きて帰ってくるのに重要なことは、ルートを熟知している山岳ガイドが先に登り、他のアルピニストは後に続くこと、その逆はあり得ない」と、著者は明言している。

ルートの閉鎖をも含むルートの管理と整備、固定ロープの保守点検、登山情報の提供、救助出動といった、マッターホルン登山に関わるすべての面にわたって責任体制が確立されている。登山が大衆化した現代の状況の中で安全な登山を保障しようとするなら、その場合の一つの方向性を示唆するものなのかもしれない。考えてみるべきテーマだ。

（飯田年穂）



■8月の理事会は夏休みのため休会でした。

ルーム日誌 8月

1日 三水会

3日 総務委員会 高尾の森づくりの会

4日 常務理事会 YOUTH CLUB

5日 会員データ管理システムWG

6日 YOUTH CLUB ネット

7日 パール大地震救援WG

17日 山岳地理クラブ

18日 110周年記念事業実行委員会

19日 スキークラブ スケッチクラブ

20日 00会 マウンテンカルチャー

21日 クラブ

24日 青年部 つくも会

25日 休山会

26日 YOUTH CLUB

27日 学生会

28日 緑爽会 デジタルメディア

29日 委員会 スキークラブ

30日 自然保護委員会 麗山会

31日 日本山岳会再生委員会

31日 会

31日 総務委員会

31日 土曜会

31日 支部事業委員会 YOUTH CLUB

31日 H CLUB

31日 8月来室者 296名

会員異動(8月分)

物故

山下 潔 (5985) 15・3・26

高野實之輔(11655) 15・1・18

退会

綿引安人 (8050) 信濃

袴田靖子 (10799)

佐藤恵美子(11811)

渡辺顕次 (13925) 東京多摩

渡邊 豊 (15589) 関西

I

N

F

O

R

M

A

T

I

O

N

インフォメーション

◆訳者が来日 『日本百名山』英訳版を語る

昨年末に出版された『日本百名山』

の英訳本『One Hundred Mountains

of Japan』の訳者マーティン・フッド

Martin Hood 氏と夫人の山田晴美

さんを招いて、翻訳にまつわる苦

労や英訳版の背景、日本の山と山

の本について、そして「名山」の概

念について語っていただきます。

話は日本語主体ですが、一部、夫人

による通訳の可能性もあります。

日時 10月16日(金) 18時30分

場所 日本山岳会 集会室

問合せ 三好まき子

TEL 090-8019-8601

344mm@nbe.nifty.com

*参考 会報「山」2015年3月

(838)号(図書紹介)欄

◆講演会のお知らせ

1956(昭和31)年、第1次南

極観測隊に参加され、JACにお

いても長く自然保護活動に携わり

後に副会長、評議員を歴任された

中村純二名誉会員に、様々な経験

談とともに近年の欧州の旅の思い

出などをスライドを交えてお話し

いただきます。

日時 10月15日(木)18時半

場所 JAC 104号室

定員 先着30名

問合せ 松本恒廣

TEL & FAX 03-63626-2892

tomuraushi910@yahoo.co.jp

◆編集後記◆

●先月のこと。登山の合間に山研

に立ち寄った。新管理人の元川里

美さんとしばしおしゃべり。善六

沢から清水川に使用する水源を変

えたことによる変化や、キツネが

遊びに来る話、これまで梓川の左

岸で仕事をしていただけ、右岸

に引越して樹木や林床植物の違

いを感じていること、それと、元

川さんが最近観察を続けているヘ

ビの話など、聞かせてくれた。つ

くづく、彼女のような人をナチュ

ラリストというのだと思う。山研

に泊まるメリットや愉しみはいろ

いろあるが、元川さんとおしゃべ

りできることもまた、魅力のひとつ

ではないだろうか。

●秋の閉所まで後少しあるので、

どうぞ皆さん、遊びに行ってください。

(柏 澄子)

日本山岳会会報 山 844号

2015年(平成27年)9月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 小林政志
 編集人 柏 澄子
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社